

## 幼児が「仲良し」になる過程

松田杏里<sup>1</sup>

### The process of children's making friends

Anri Matsuda<sup>1</sup>

The purpose of this study was to find out the process of children's making friends, focusing on a boy of newcomer in transition period. Preschool children as newcomer accumulate classmate information through their experience of spending time and doing things together. Peer relationship of newcomer is based on his own history of interaction and involvement. The following results were obtained from examining the newcomer's relationship with his peer: 1) At the time of entrance of preschool, the peer relationships formed only with newcomers don't continue fixedly as it is. 2) A newcomer expanded relations from the newcomer to the oldcomer, and it became clear that newcomer was settled in the activities with the specific newcomer again after that.

**Key Words:** friends, peer relationships, preschool, newcomer

#### 問題と目的

幼稚園や保育所におけるクラス集団が子ども集団として持つ大きな特徴は、それが入園の時点で新たに形成され、1年あるいはそれ以上継続する点である(倉持・柴坂, 1999)。入園当初の見知らぬ者の集まりが、一緒に生活する経験を重ねることで次第にお互いを理解するようになると考えられる。倉持・柴坂(1999)は、そのような経験の積み重ねを“関わりの歴史”と呼び、子どもの他者認知にとって重要なものであるととらえている。つまり、子どもの他児に関する認識は入園初期の漠然としたものから、経験を重ねることでより根拠をもった重みのあるもの(倉持・柴坂, 1994)となっていくのである。

これまでの幼稚園の入園期の適応を問題にした研究では、幼児の積極性(対人的交流の多さ)や肯定的・友好的働きかけの多さが、入園後1カ月の仲間内地位を規定する(中澤, 1992)ことが明らかにされている。一方、高濱・無藤(1997)は、幼稚園の進級時も入園時と同様に子どもが新たな適応を迫られる移行期であるとして、進級児が新入園児にどのように適応するかという面に重点を置き、仲間関

係の変容プロセスを検討した。その結果、進級児が新入園児の参入によって活動相手の変化、活動時間の減少などの影響を受けていること、移行期における対象児の適応行動の違いは、対人行動の積極性の個人差に関係することを明らかにした。さらに、新入園児の参入による影響と既存の仲間関係に起きている変化とが相互作用した結果、クラス内に新入園児と進級児との活動が増え、新たな関係が生まれるという変化が引き起こされたことと示唆している。

また、大豆生田(2000)では高濱・無藤(1997)と同様に、3歳児クラスから4歳児クラスへの進級時を移行期として、新入園児の「仲間入り」の大きな障害となる進級児側にある「境界線」に着目し研究を行なった。その結果、古参者(進級児)が意図的に新参者(新入園児)を差別化する際には「言葉による拒否や否定」、「遊びのイニシアチブをとらせない」、「遊びの暗黙のルール」といった「境界線」が存在することを明らかにした。そして、この「境界線」が生じる背景には、古参者(進級児)集団内の権力関係が存在し、集団外の者に排他的に関わるという閉鎖的な関係構造があることを示唆している。

このような進級時の仲間関係に関する研究は、新入園児と進級児との相互作用に重点を置き、その関係構造をダイナミックにとらえてきた点で有意義な

<sup>1</sup> 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

研究である。また、田宮（2000）によれば、幼児の仲間関係には1年間で「第1期：友だちとの出会い」「第2期：けんかをして絆を深める」「第3期：仲間のネットワークが崩れる」「第4期：お互い認め合う関係に」の変化がみられることがネットワーク分析から明らかにされている。しかし、これらの研究では新入園児ならびに進級児の仲間関係の形成過程が実際にどのような展開で進んだのかという点が明らかにされていない。入園と進級という環境の変化の中で積み重ねられていく、子どもたちの“関わりの歴史”について実際のやりとりを通して詳細に検討していくことにより、移行期としての進級時における仲間関係の変容過程を明らかにする必要がある。

そこで、本研究では“関わりの歴史”を持たない新入園児に焦点を当てて観察を行い、その“関わりの歴史”を詳細に検討することにより、新入園児が特定の子と「仲よし」になり、仲間関係を形成していく過程を明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 1) 対象児

東広島市内H幼稚園の年中児クラスに所属する男児ショウ。年中児クラスは、年少児クラスからの進級児と春から入園した新入園児から成っている。対象児ショウは、新しく入園した新入園児であり、観察開始時において常に他の新入園児と一緒に活動していたため対象児とした。

なお、対象児も含めエピソード内に登場する名前は全て仮名であり、進級児の名前は斜体で表記し新入園児と区別した。

### 2) 観察期間

2003年4月下旬から7月上旬までを前期、10月上旬から12月中旬までを後期とし、週1回のペースで観察を行なった。ただし、前期においては6月に幼稚園での教育実習期間が2週間あり、その期間は観察を行なわなかった。そのため前期は7回、後期は9回の観察となった。

### 3) 記録方法

登園後（9：00）から片付け（10：30）までの自由遊び時間に、保育に参加しない「観察者」の立場を取り、対象児への関わりを最低限にして観察に徹した。記録の収集は筆記記録を採用し、対象児の行動や発言、及び活動相手、周囲の状況等をフィールドノートに記述した。

### 4) 分析方法

まず観察記録から、対象児と一緒に活動している相手と、一緒に活動していた時間（観察時間あたりの割合）を量的に検討するため、観察前期・後期それぞれにおいて上位3名を抽出してグラフを作成し、分析Ⅰとした。「一緒に活動している」状態は、高濱・無藤（1997）を参考に、(1) 明確な仲間入りを経て一緒にいる、(2) 自分から働きかける、仲間から働きかけを受ける、(3) 実質的に相互交渉がある、の3項目に1つ以上当てはまる状態と定義した。次に、観察記録の中から特徴的なエピソードを取り上げ、対象児が他児とどのような関わりをしていたのか質的に検討し、分析Ⅱとした。最後に、分析Ⅰと分析Ⅱの結果及び観察前期・後期で得られた複数のエピソードを通して対象児の仲間関係がどのように変化したのかについて検討し、全体的考察としてまとめた。

## 結果と考察

### 分析Ⅰ：ショウの活動相手について

観察前期において対象児ショウが一緒によく活動した相手を新入園児と進級児それぞれにおいて上位3名を抽出した。その結果、新入園児はタクヤ・ツカサ・ヒロシであり、進級児はカズキ・タロウ（他に該当者なし）であった。また観察後期においては、

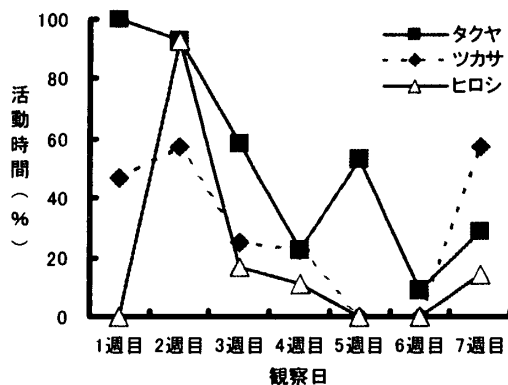


Figure 1-1 前期の新入園児との活動時間

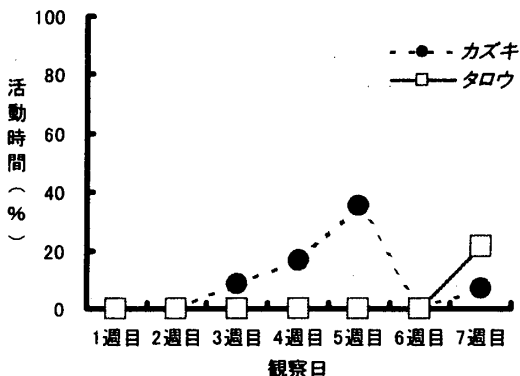


Figure 1-2 前期の進級児との活動時間

新入園児はタクヤ・ツカサ・シロウであり、進級児はタカシ・タロウ・タイキであった。

観察前期のFigure 1-1とFigure 1-2のグラフから、対象児ショウと一緒に活動している相手はタクヤやツカサを中心とした新入園児であることが分かる。しかし、夏期休暇に入る直前になると、Figure 1-1のグラフは時間の経過とともに右下がりになり、新入園児との活動時間が少し減っている。また、Figure 1-2のグラフから進級児のカズキとの活動時間が増えており、新入園児だけでなく進級児とも活動するようになったことが分かる。

一方観察後期のFigure 2-1とFigure 2-2のグラフでは、入園当初ほとんどの時間を一緒に過ごしていた新入園児タクヤやツカサとの活動時間が減り、進級児タカシやタロウ、タイキと活動していることが分かる。観察後期である10月にもなると、新入園児だけでなく進級児も新しい環境に慣れてくる。そのため、新入園児と進級児の相互交渉が活発に行なわれたと考えられる。しかし、その後再び新入園児タクヤとの活動時間が増え、進級児たちとの活動時間に減少がみられた。対象児ショウにとってタクヤが特定の活動相手となりつつあることがうかがえる。

観察前期と後期のグラフを比較すると、観察前期

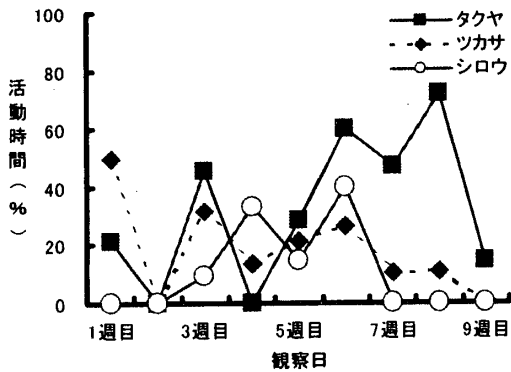


Figure 2-1 後期の新入園児との活動時間

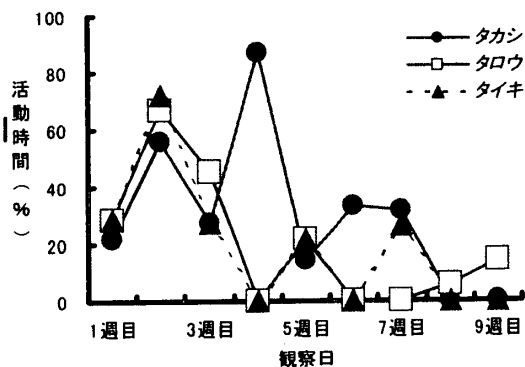


Figure 2-2 後期の進級児との活動時間

においては最初新入園児との活動時間が多く、次第にそれが減少しており、新入園児との活動から進級児との活動へという関わりの変化が見られた。一方観察後期においては観察前期とは異なり、新入園児との活動時間が減少しており、それに伴って一旦進級児との活動時間が増加するがそれも次第に減少し、Figure 2-2のグラフは4週目以降右下がりになった。しかしFigure 2-1のグラフが右上がりになっていることから、再び新入園児との活動時間が増加し、進級児との活動から再び新入園児との活動へという関わりの変化が見られた。

## 分析Ⅱ：事例からみたショウの仲間関係

次に、対象児ショウがどのような経験を積み重ねて仲間関係を形成し、「仲良し」になっていくのかについて明らかにするために、特徴的なエピソードを取り上げ、各エピソードごとに考察していく。

### 【エピソード1；4/24】

ショウ・タクヤ・ツカサは部屋に戻り、小さな積木で遊びはじめている。突然、遊戯室の方へツカサと走って行ったタクヤであるが、すぐにショウのところに戻る。ショウは、自分が作った4匹のペンギンを見せる。

ショウ「みてー。」

タクヤ「つくったん？」

その後すぐにショウは作品に熱中し、タクヤは再びその場を離れる。ショウは、タクヤの姿が見えないので、辺りをキョロキョロ。

ショウ「たっくんは？」

タクヤは、すぐに遊戯室から戻り、ショウの傍に座る。

タクヤ「ショウくん、ただいま。」

タクヤ「みんな（ショウ・タクヤ・ツカサ）でやろう」

ショウ「だめ、2人だけでやる。」

タクヤの方を見ながらこう言ったが、結局3人で遊ぶことになる。

エピソード1では、ショウがタクヤの姿を探している。この日は、遊戯室から部屋へ移動して積木やパズルで遊ぶことになったショウの隣りにタクヤがいて、ショウが作るものを手伝ったり、真似したりするタクヤの姿が観察された。タクヤは自分が始めた遊びではないためか、すぐに飽きてしまい遊戯室の方へ突発的に走り去っていくが、すぐにショウの所に戻ってきていた。ショウは、姿が見えなくなるとタクヤを探し始め、「みんなでやろう」というタ

クヤの提案に対し「2人だけでやる」と答えている。これらのことから、ショウにとってタクヤは他の新入園児とは違った存在であったことがうかがえる。

【エピソード2；5／15】

9:20頃、ショウが登園する。いつもより遅い時間に登園してきた。そのため、タクヤは既に登園しており、遊戯室で遊んでいる。ショウはシール貼りを終え遊戯室にいるタクヤをみつけて部屋から呼びショウ。

ショウ「タクヤ」

当然、遊戯室にいるタクヤくんには聞こえず、気づかない。ショウはひとりで部屋にいるが、立っただけ。タクヤをじっと見ている。積木スペースの近くに行く。多目的室(遊戯室に隣接している)の窓から顔をのぞかせ、遊戯室の中央へ走り出す。気を引くための行動であるようだが、トモキだけしか気づかない。ショウは、再び多目的室へ戻り先程の行動を繰り返す。今度は、みんなが気づき笑い出す。その笑いに気づいたヒロシも戻ってくる。ショウは仲間入りを果たす。ウルトラマンごっこをやっている様子。

ショウ「タクヤ、タクヤ」

タクヤは無反応。

ショウ「みててー」

積木の上から飛び降りる。タクヤくんは見えない。

ショウ「タクヤ、見てて」

また飛び降りる。今度はタクヤも真似して降りる。4人はそれぞれ、好きなウルトラマン〇〇に扮しているらしく、バラバラにアクションごっこをしている。そのうち、ショウ・タクヤ・ヒロシが集まる。叩きあい、蹴りあいが始まる。ヒロシ、ショウからの一撃が痛かったのが怒る。

ヒロシ「そんなことすると、リーダーに言っとくよねー」

タクヤ「ねえー」

ショウ、一気に泣きそうな表情になる。

ショウ「そんなこと言うなら、ぼくはひとりで遊ぶ!!!」

ショウ、大きな声で叫び泣き出す。タクヤとヒロシは、罰の悪そうな表情だが、謝らない。

遅れて登園してきたために、遊び集団になかなか入れないショウの姿が観察された。遊び集団は、トモキ以外新入園児であり、これまで比較的一緒に活

動していた子たちであった。それにも関わらず、既に遊びが始まっているような集団に仲間入りすることは、新しい生活を初めて間もない新入園児にとって困難を要するのであろう。

なんとか仲間入りを果たしたショウであったが、ヒロシと喧嘩をしてしまう。ヒロシが口にした、「リーダー」が誰なのかは明確になっていないが、告げ口されそうになることに対して、ショウは怒ったのかもしれない。しかし、ショウのヒロシに対する一撃をきっかけとした喧嘩であったこのエピソードであるが、ショウにとっては、タクヤが味方をしてくれなかったのがショックだったようである。その証拠に、この後泣き止んだショウは、外で三輪車で遊び始めたタクヤとヒロシを追いかけ、「タクヤくんのいじわるー!」と叫び続けた。

【エピソード3；6／26】

9:05頃、ショウ登園。この日もタクヤは既に登園し、朝のルーチン(シール貼りやタオル掛け)を終えカズキと遊び始めている(工作)。登園後、シール貼りをしているショウの傍にタクヤがやって来る。

タクヤ「今日カズキくんとあそぶんよ」

ショウ「えー？」

タクヤ「今日カズキくんとあそぶんよ」

そう言ってタクヤは、カズキと工作用の机の方へ行き、牛乳パックで何かを作り始める。

ショウ「ねー、待ってたっくん」

タクヤとカズキは、ショウがシール貼り等を行なっている間に、牛乳パックの作品を作りあげ2人で遊戯室へ走っていく。その様子を見ていたショウも、ひとりで牛乳パックで何かを作り始める。

5月末頃から、自由遊び時間中の殆どを一緒に活動していたショウとタクヤに変化が見られるようになった。これは、エピソード3からも分かるように、ショウの仲間関係の変化というよりも、タクヤの仲間関係に変化が生じてきているためである。以前は登園後すぐに、お互いの姿を探して一緒に遊び始めることが多かった。しかし、この頃になるとショウとタクヤのどちらが先に登園しているかに関わらず、タクヤはショウ以外の子と外で遊ぶことが多くなっていた。そこにショウが仲間入りをするという姿がよく観察された。

【エピソード4；10／17】

9:25頃、タカシがそばに来て、一緒に何か

作ろうということになる。部屋に入り、ショウが手首につけていたもの(黄レンジャーの腕輪?)の赤いやつをタカシに作ってあげることになるが、タカシは隣でくじ引きを作っているタロウとタイキが気になる様子。タカシはタロウの方を向いている。

ショウ「何マークにする？」

タカシ「え？」

会話が上手く続かないが、ショウはあまり気にしていない様子で、黙々と作る。

タカシ「誰がお金払う人？」

タロウ「タカ！」

ショウ「タカ、できるぞ」

タカシ「…」

ショウ「タカ、できたぞ。あとは俺がつけてあげる」

タロウ「タカ、くじ引きしないのか！」

ショウ「タカ、赤レンジャーやめるのか！」

タロウ「じゃんけんできめよーぜ」

タカシ「いいよ。2人とも俺と遊びたいんだろ？」

じゃんけんで解決することになる。結果ショウが勝つ。しかし、タロウは納得いかない。

タロウ「でもさ、おまえ嘘つきじゃ。それに俺昨日遊ぶ約束した」

ショウ「え？嘘つき？俺たかくんと仲間よ」

タロウ「じゃーさ、ショウくんお父さんになんて出来ない？」

ショウ「えー！？」

タロウ「じゃ、大嫌いになるで」

ショウ「…」

タカシ「俺はお金払う人だっけ？」

ショウ「分かったよ、なるよ…」

と言いつつ、赤レンジャーを作り続ける。

タロウ「ショウくん、俺の仲間なんで！」

ショウ「…」

タロウ「いつもタカくと仲間じゃなくせに！」

ショウ「…」

タロウ「ショウくん、あのねタカくんがやるって言うてるから、おまえねーやれないよ。罰があたるで」

ショウ「お父さんになるよ」

タロウ「…」

この後、ショウはなんとかくじ引きに参加できた。

観察後期から、ショウは進級児であるタカシと一

緒に活動する姿が観察された。タクヤやツカサといった新入園児同士で活動する時期から、進級児とも関わりを持ち始める時期へ変化していることがうかがえる。しかし、このエピソードでは進級児であるタロウが「くじ引き作り」活動のイニシアチブをとっており、ショウとタカシの遊びの妨げになっている。タロウのショウに対する「いつもタカくと仲間じゃなくせに」という言葉は、タロウからショウに向けられた意図的な「境界線」作り行為(大豆生田, 2000)である。このことから、進級児であるタロウが、新入園児ショウの参入を受けて既存の仲間集団を維持しようと試みていることがうかがえる。

#### 【エピソード5:10/24】

10:00頃、ショウが先で山に入る。タクヤもついて来る。タクヤが山を登り始めたとき、ヒロシがやって来る。山の上にある小屋の前ではタロウたちが恐竜退治ごっこをやっている様子。ショウその様子に気をとられ、タクヤとはぐれる。

ショウ「たっくん、どこにいったんだろう」と言いながら、下においてタクヤを探し、また登る。再び下りたり登ったりして、タクヤを探す。そこへ、タクヤとヒロシが登ってくる。

ショウ「あ、たっくん」

ヒロシ「おい、ショウ。ライター。バキューン」

ショウに木の棒をむける。

ショウ「あ、ひろしくんそんなことするとから、もう嫌い」

ショウは上を登っているタクヤくんを追う。

ヒロシ「打てばいいのに…」

ショウ、タクヤのベルトが壊れていることに気づき、修理するよう勧めるがタクヤは断る。タクヤが登るのを一生懸命について行く。

タクヤがそりを取りに行く。ショウも取りに行く。傾斜が急であるため山に登るのは、タクヤが圧倒的に早い。ショウはフラフラしながら途中で諦める。

ショウ「ぼく、ここからすべる」

上手く滑れない。

ショウ「ぼくやめた」

一方、タクヤは上から勢いよく滑る。

ツカサとヒロシが登ってくる。ショウ、ツカサに登りやすい所を教えてもらいながら登る。

タクヤは2回目の滑り。ショウなぜかそりではなく、お尻で滑る。よく滑るので怖いのか焦っ

て手を使って止め、立ち上がろうとするが2回  
続けて足が滑り、しりもちをつく。滑り終えて  
下から登ってきたタクヤ、その様子を見て笑  
う。

ショウ「わらったら、大嫌い！」

タクヤ「え？」

ショウ「ごめんっていわんと大嫌い！」

タクヤはそのまま何も言わずに上に登り滑り始  
める。ショウはもう一度登ろうとするが、やは  
りこける。

ショウ「やっぱだめだ」

ショウ「タクヤ…」

タクヤに呼びショウが、タクヤは大興奮で聞こ  
えていない様子。

ショウ「そんなわけにはいかない」

何のことを言っているのか不明。

ヒロシも楽しそうに滑っている。下から2人を見  
つめているショウ、また登ろうとするが失  
敗。なぜかワゴンを取りに行く。途中でツカサ  
に会う。

ショウ「さっきは教えてくれてありがとう」

ツカサ「うん」

その後もショウはそり滑りに参加することな  
く、部屋に戻る。

観察後期に入っても、ショウがタクヤを慕ってい  
ることがうかがえるエピソードである。積極的に山  
を登り、そり滑りを楽しむタクヤに必死について行  
こうとするショウであったが、うまくいかず結局諦  
めて部屋に戻ってしまった。このエピソードのよう  
に、外での活動の場合、積極的に活動するタクヤと  
思うように活動ができないショウは、活動の途中で  
離れてしまうことが多い。活動の好みや得意な程度  
に差がみられるようになってきている時期であると  
考えられる。

#### 【エピソード6；12／18】

裏山に登ると、ショウは、タクヤが奥の小屋で  
ヒロシ、ケン、コウジと遊んでいる姿を見つけ  
る。ショウは急に立ち止まる。すぐに向きを変  
え、黄色いカゴのある小屋に行く。一人で小屋  
に登ったりしているが、しばらくするとタクヤ  
たちの方へ向かう。表情は今にも泣きそうな顔  
である。みんなが遊んでいる小屋にすぐ近づく  
のではなく、まわりの木の所でまた立ち止まり  
みんなの様子を見ている。M先生の誘いも断る  
が、そこから離れることはなく、ずっと木の陰  
から様子をうかがっている。S先生がショウの

そばに行く。

S先生「どうしたの？一緒に行こうか？」

ショウ「あのね、たっくんと遊ぶ予定だった  
のに…そっちで遊ぶ予定が嫌だった」

話しながらショウは泣き始める。

S先生「約束したの？」

ショウ「約束してないけど、ずっと遊んでた  
から…」

S先生「行ってみれば？」

ショウは、しぶしぶ歩き出す。

ショウ「だめ！決めたらだめっ！」

突然大きな声をだしてタクヤに近づく。

ショウ「決めたら嫌だ。ずっと一緒に遊んで  
いたんだ」

タクヤ「たっくんとひろしくんが決めたん  
よ」

ショウ「決めたらだめ！」

さらに激しく泣き出すショウに対してタクヤも  
少々怒り出す。

タクヤ「入れてっていわなきゃだめっ！」

ショウ「僕は一緒に遊びたい！決めたらだ  
め」

タクヤ「僕はコウジくんと遊びたい」

ショウ「たっくん、そうやって決めたら嬉し  
くない」

ショウは泣きすぎてうまく話せない状態になっ  
ている。その様子を見てS先生がショウの近く  
に来る。

S先生「なに？」

ショウ「アバレンジャーごっこしたかった」

S先生「泣いてたらダメよ」

ショウ「だけど悲しい気持ちを分かってほし  
い！」

そう言って激しく泣くショウをS先生が抱きし  
める。少し落ち着く。また、タクヤの方へ近づ  
く。

ショウ「たっくん、一緒に遊びたかったから  
決めちゃ嫌だった」

タクヤ「…」

ショウ、泣き続ける。

タクヤ「それだったら、2人でコックさんにな  
ったらいんじゃない？」

ショウ「嫌だ！アバレンジャーごっこした  
い」

タクヤ「今はしたくない」

S先生「あとですか？」

タクヤ「あとで」

ショウ「いやだ…」

ショウはやる気ない様子だが、S先生に促されてレストランごっこの椅子に座る。

タクヤ「箸がないな～」

ショウ、タクヤの声色に笑う。

コウジ「テーブルがない」

そう言われてタクヤはコウジとテーブルを取りに行く。しばらくして戻ってきたタクヤに

ショウ「いれて」

タクヤ「いいよ」

ショウ「ひろしくんは？」

タクヤ「ひろしくんは、もうサッカー選手」

ショウ「そっか」

遅れてコウジも戻ってくる。

ショウ「コウジくん、いれて」

コウジ「いいよ」

ショウ「ひろしくんはサッカー選手だからダメ？」

タクヤ「サッカー選手はもうだめよね！」

ヒロシの代わりにショウが入り、それを確認できたことでショウも安心したのか、この後3人でレストランごっこを再開し仲良く遊んだ。

この日は、ショウが登園したときからタクヤの姿は室内にはなかった。ショウはタクヤの姿を探しながら、ひとりで遊戯室の積木で家のようなものを作り、仲間に入ろうとした女兒に対し「タクヤがくるのに」と不満をもらしていた。タクヤがなかなか現れないので、落ち着かない様子で外に探しに出たのである。M先生と一緒に裏山に登りタクヤの姿を見つけたショウであったが、その表情は嬉しそうなものではなかった。自分はひとりでタクヤが来るのを待っていたのだというショウの想いが溢れ出したエピソードである。

観察後期に入り、新入園児のタクヤだけでなく進級児とも一緒に活動することが多くなったショウであったが、やはりタクヤの存在は大きかったことがうかがえる。想いを一生懸命に伝えようとするショウに対し、タクヤは臆することなく自己主張し、自分の意見を伝えた。ショウの一方的な意見をタクヤが黙って聞くだけでは、今後も2人の関係においてショウのわがままが通ってしまうことになる。このエピソードは、2人がお互いの気持ちを知っただけでなく、2人が対等な関係として仲良くなるきっかけとなったと言える。

## 全体的考察

本研究は、移行期としての進級時における新入園

児ショウの仲間関係について、分析Ⅰと分析Ⅱを行ってきた。分析Ⅰのグラフ（Figure 1-1, Figure 1-2, Figure 2-1, Figure 2-2）と分析Ⅱで取り上げたエピソードから、入園当初、新入園児たちだけで形成されていた仲間関係がそのまま固定的に継続するのではないこと、また新入園児が、新入園児同士の活動から進級児との活動へと関わりを拡大し、その後再び特定の新入園児との活動へと収束していくことが明らかになった。

幼稚園という新しい環境に置かれ、不安な気持ちでいっぱいの新入園児は、進級児たちで構成された既存の仲間集団にすぐに仲間入りをするのではなく、新入園児同士で活動し始める。その中で幼稚園生活における様々な情報や経験を積み重ね、お互いの理解を深め、一緒に遊びたい子を見つけていくと考えられる。そして、次のステップとして、新たな関わりを持つ段階へと移るのである。この結果は、幼児の仲間関係の形成過程に焦点を当てた田宮（2000）の結果と一致している。加えて、本研究が進級時という移行期に焦点を当てていることを考慮すると、田宮（2000）の「第3期：仲間のネットワークが崩れる」時期は、新入園児と進級児との新しい関わりが増加する時期であると換言できる。またこの時期は、新しい関わりが増加する時期であるからこそ、古参者（進級児）による、新入園児の仲間入りに対する「境界線」作り行為が見られる時期でもあった。

さらに、本研究で得られた結果において興味深い点は、観察後期の前半に進級児と一緒に活動する時間が増加したショウが、後半になると再び新入園児のタクヤと一緒に活動するようになっている点である。新入園児だけでなく進級児との関わりを経たからこそ、タクヤと一緒に活動する居心地の良さを再認識したと考えられる。

以上のように、移行期としての進級時において、適応を求められる新入園児の仲間関係は、様々な経験の積み重ねを経て変化していることが明らかになった。つまり、新入園児や進級児は実際のやりとりの中で気の合う仲間を見つける、仲間入りの際に困難を要する、対人葛藤場面を乗り越える等の経験の中で、幼児の心は安定したり不安定になったりする。その心の変化にともなって幼児の仲間関係も流動的に変化し、そしてその経験が幼児ひとりひとりの“関わり”の歴史”となっていくと考えられる。今後は、安定したそれぞれの仲間関係内において、更なる仲間理解が深まり、新たに力関係が生まれたり、他者を排除したりすることが予想される。そのため、「仲良し」の持つ複雑性から子どもたちが人

間関係のとりかたを学んでいく(岩田, 2000)ことを考慮に入れ, 年長児クラスへの進級後も継続的に観察を行い, それぞれの仲間関係内の変化についても検討していく必要がある。

### 引用文献

岩田恵子 2000 なかよしとは何か 幼稚園における4歳児の仲間関係を通して 日本女子大学紀要, 47, 19-24.

倉持清美・柴坂寿子 1994 園の中での他者を見る視点2 日本発達心理学会第5回大会論文集, 297.

倉持清美・柴坂寿子 1999 クラス集団における幼児間の認識と仲間入り行動 心理学研究, 70, 301-309.

中澤 潤 1992 新入園児の友人形成—初期相互作

用行動, 社会認知能力と人気— 保育学研究, 30, 98-106.

大豆生田啓友 2000 新入園児の「仲間入り」に関する関係論的考察—障害となる「境界線」の問題に着目して— 短大論叢, 104, 51-62.

高濱裕子・無藤 隆 1997 移行期の仲間関係—新入園児の参入にともなう進級児の相互作用の変化— 日本家政学会誌, 48, 279-287.

田宮 緑 2000 事例から見る幼児期の仲間関係と自己形成 保育学研究, 38, 12-19.

### 謝辞

長期にわたって観察をさせていただきました幼稚園の先生方と園児の皆様, 指導頂きました広島大学大学院教育学研究科附属幼年研究施設教授山崎晃先生, 助教授杉村伸一郎先生に心よりお礼申し上げます。